



は神の子です。あなたはイスラエルの王です」と信仰表明をします。それに対するお答えとして、イエスはご自身をヤコブの夢の中の「はしご」（階段）にたとえて、自分こそ聖なる天（神）から罪に汚れた地（人間）に下って来たはしごであり、この道を通ってのみ、人は地から天に上ることが出来る、すなわち、神に近づくことが出来る。そして、その道が今開かれたことを示されたのでした。今、天と地の橋渡しをする人物、ユダヤ人たちが祈り求めて来たメシア、救い主が神を求める者ナタナエルの目前にいる。救い主イエスを受け入れることが、つまり、神がともにいて下さることの確信になるというお答えだったのです。このように、だれでもヤコブのように、「まことに主がこの所におられるのに、私はそれを知らなかった」（創世記 28:17）と信仰告白するとき、その場所が各自の「天の門」、「神の家」（ベテル）になるのです。

さて、ラバンの家に迎え入れられたヤコブは一目でラケルを愛し、七年間の労働を結納金として結婚の約束をします。果たして七年後、母リベカの兄ラバンのだましにより、ヤコブの愛した妹ラケルではなく、まだとついでいなかった姉のレアと結婚させられたヤコブはさらにラケルのため七年間の重労働に同意します。しかし逆境にあって、神の祝福は豊かです。ヤコブは多くの子に恵まれ、アブラハム、イサクの神を知らないルベンの目にも、「私はあなたのおかげで、主が私を祝福してくださったことを、まじないで知っている」（創世記 30:27）と、神の祝福はヤコブの周りにも惜しみなく注がれたのです。しかし、実生活においては、過去犯した自らのだましをはるかに上回るラバンのだまし、欺きに、悪に対し善で報いる驚くべきヤコブの忍耐力、義父に対する忠誠が高く評価される一方で、優柔不断で厄介事には見て見ぬ振りをする、父権を行使できない軟弱な父親像が、そばめ二人を含む四人の妻とその子どもたちを統率して行く能力の不足と相次ぐ不祥事の勃発に、浮き彫りにされて行くのです。

ヤコブは神から少なくとも七つの啓示を受けたことが記されていますが、そのうちの一つは、ヤコブをラバンの許で飛躍的に富ませることになった家畜のビジョンでした。ヤコブがビジョンで示された家畜はすべて、ベドウィンの羊や山羊には珍しい種類、しま毛、ぶち毛、まだら毛のもの、黒毛の羊だけでした。そこで、主が示して下さったように、ラバンにヤコブの労働の報酬を願ったところ、珍種の家畜ばかりが勢いよく繁殖し、六年間のうちにヤコブはもう十分大家族を養っていけるだけの大変な物質的恵みを得ることになったのでした。神が約束された守りのうち、ヤコブは一族郎党引き連れて、二十年ぶりに平和裏にラバンの許を去り、カナンへと向かいます。しかし、最後の難関は兄エサウとの対面で、神に完全には頼り切れないヤコブは、最後まであれこれ方策を考え、心が定まらないうちに一気に翌朝エサウと対面という事態に追いやられます。その土壇場の真夜中、エサウならぬ神と格闘するという不思議な出来事が起こります。不安、恐れにおののき、気をもみ、人間的方策に走るヤコブの問題は、神との関係にあったのでした。祝福の源が神であるという確信に到るには、肉体に神の刻印が刻み込まれなければならなかったのです。格闘の結果、神がすべてを司っておられるということを知ったヤコブは、もはや古き人、だましやではなく、神に支配される者イスラエルとして生まれ変わったのです。その刻印は歩行困難という肉体への障害でしたが、神のご介入により恐れを取り除かれ、すべてを主に任せ、自らを無にする事が出来るようになったヤコブのエサウとの対面は、予想だにしない和解に終わったのでした。神はエサウの側にもご介入され、二人の再会が平和裏になされるよう導いて下さったのでした。

しかし、カナン入りしたものの、父イサクの許へ戻ろうとせず、シェケムにずるずると滞在しているうちに、次男シメオンと三男レビがシェケムの町の男子を皆殺しにするという不祥事が勃発します。割礼を受けて自分たちと同じようになれば、シェケムの息子と彼によって強姦された妹のディナとの結婚を許すと、父ヤコブを差し置いて息子たちが勝手に条件を出し、もくろんだ虐殺事件、陰謀でした。シェケムでの悪評を恐れ、ヤコブはついに移動せざるを得なくなります。ベテルからベツレヘムを経てイサクの許へと大移動の間にも、災いはヤコブを追ってきます。ヤコブが九十歳を過ぎてやっとラケルとの間に生まれた、ヤコブにとっては寵愛の十一男ヨセフが、兄たちのねたみによってエジプトに向かうミデヤンのイシュマエル人に奴隷として売られるという悲惨な出来事でした。ヤコブにはヨセフが悪い獣の犠牲になって殺されたと告げられたため、二十二年後にエジプトの大臣になっていたヨセフと再会するまでは、ヤコブは息子たちにずっとだまされ続けていたのでした。十七歳にもなったヨセフのヤコブの人生からの突然の消失はヤコブにとって悲嘆のやり場のない損失で、家族はますます分裂に拍車をかけて行ったに違いありません。父の慰められることのない悲しみを見るに忍びなくて、四男ユダが兄弟たちから離れて、多神教、偶像崇拜、人間犠牲などがちまたで行なわれているカナン人たちの間に天幕を張ったのはそのようなときでした。そこへまた、災禍は容赦なく訪れます。寵愛のラケルがヨセフに次ぐ二人目の息子ベニヤミンを難産の後死亡という悲劇です。しかも、心を一新して、「ベテルに上って行こう。私はそこで、私の苦難の日に私に答え、私の歩いた道に、いつも私とともにおられた神に祭壇を築こう」（創世記 35:3）と、一族中の異国の神々、偶像を取り除き、身を聖め、二十二年前、神の御臨在を体験して感激したベテルで祭壇を築き、新天地に向けて移動中の出来事でした。それはかつてヤコブがラバンの家の守り神、偶像を盗んだと濡れ衣を着せられたとき、愛妻ラケルが盗んでいたとは露知らず、「あなたの神々をだれかのところで見つけたなら、その者を生かしてはおきません」（創世記 31:32）と誓った呪いが、ラケルの早死として実現してしまったかのようでした。ラケルをベツレヘムへの道に葬った悲嘆から覚めやらないうちに、今度はまた、長男ルベンのヤコブのそばめビルハとの不倫という問題が発覚します。父の生存中にまだ継承していない長子の権利を先取りするようなルベンの法外な侮辱行為は、しかし、ラケルの死後、ルベンの母レアを差し置いてラケルの召し使いでヤコブのそばめでもあったビルハの天幕に移った父に対するルベンの抗議であったことが多分に考えられるのです。結婚の初日から、ラケルとの比較で辱められてきた母レアを憐れむ長男ルベンの父に対する侮辱行為は、ラケル亡き後のヤコ

ブをビルハではなくレアに向けるため、長子の権利剥奪の凝らしめを十分承知の上での精一杯の母への親孝行であったのかも知れないのです。不名誉なことに、ヤコブ一族の問題はまだ続きます。人間の側で心を一新したから幸いが続くだろうという思惑とは裏腹に、信仰の歩みは確かに狭い道です。